令和７年度学校評価表

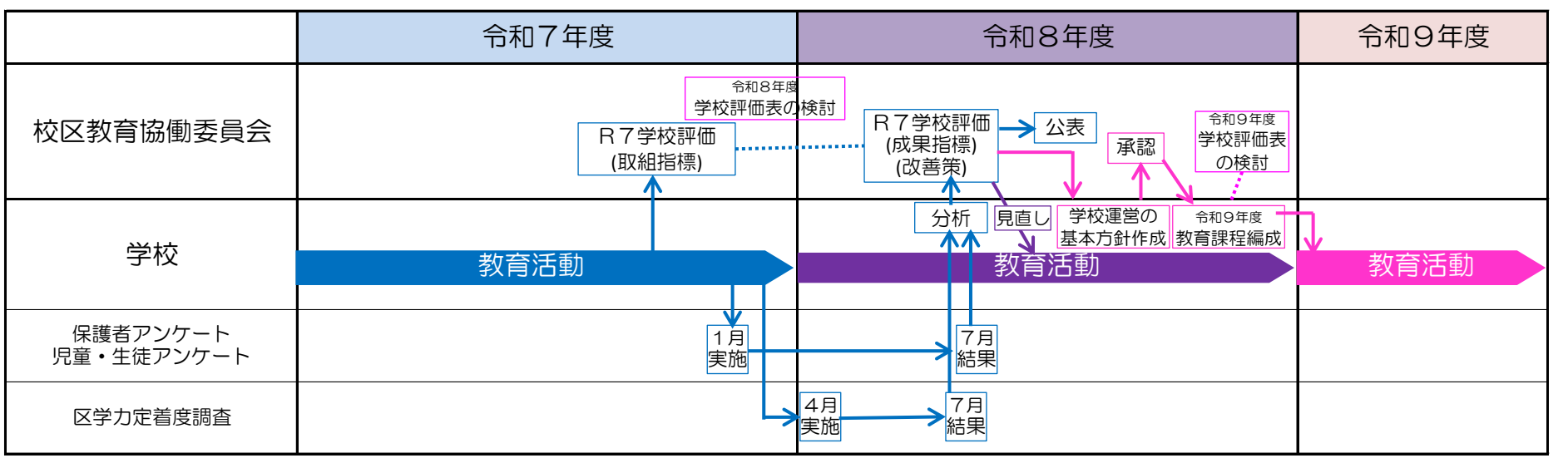
品川区立小山台小学校	校長	大沢	一郎
小山台小学校校区教育協働委員会	委員長	牧野	昭太郎

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

⑴ 学力に関すること。
⑵ 人間性や社会性に関すること。
⑶ 体力・健康に関すること。
⑷ いじめ防止の取組に関すること。
⑸ 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和７年度　学校評価　品川区立小山台小学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標	○　基礎的な知識・技能を身に付け、自ら考え表現する力を育成する。 ・　児童の学習意欲を高め、考える授業を行う。→【主体的・対話的で深い学びの実現】 ・　全教科においてコミュニケーション力や言語感覚の育成を図る。 ・　学習の振り返りや、反復練習の場を設定する。 ・　「学習のきまり」「家庭学習のきまり」に基づき、どの学級でも同じ体制で学習に向かう授業規律の確立及び家庭学習の習慣付けを促進する。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	区学力定着度調査（4月実施）では、平均正答率を 70%とする。	令和7年度4月の結果において、6学年以外は区平均を上回るだけでなく、ほぼ10位以内にはいっている。しかし、思考力に弱さが目立つ。また、成績上位者と下位者の2極化はある。	A	学力調査の結果を分析し、二極化に対する対策を4月中に検討させる。指導の重点を示し、全校での授業改善を図る。
	授業の初めにウォーミングアップを行い、脳の活性化と学習に向かう意欲喚起につなげる。	形の違いはあるにせよ、各学級で取り入れる努力と工夫をしている。ドリル的な手法を短時間行うことで、習熟や気持ちの切替だけでなく、脳の活性化も図れている。	B	3分程度、前時の復習、改善点があることと、教材の作成と共有化が課題。学校として統一した手法を確立して対応していく。
	学校独自の学習スタンダードを見直し、学校で統一したものにすることで、学習規律の定着化に務める。	4月当初に、学力向上と生活指導部に指示をだし、内容の検討を行えた。簡素化することができ、児童へ分かりやすく提示することができたた。	A	学習ルールを4月に児童に確認し、児童自身が落ち着いて学ぶための環境を築いていく自己調整する力を伸ばしていく。
	1日に複数教科でペア学習やグループ学習等の対話的学習を取り入れ、児童が自分で考え表現できる場を多く設ける。	全校の5割程度の授業において、ペア学習やグループ学習を実施することができた。教師が設定するだけでなく、児童にもペアやグループで話すものだという習慣ができつつある。	B	全学級への浸透が課題。研究推進委員会で対話的な学びを実現するための指導方法を研究し、個に応じた発表機会を設けていく。
	授業力向上のための校内研究を定期的に開催して、指導方法等の工夫改善を図る。	国語科の説明文に関する校内研究を行い、「つかむ、考える、広げる」の「広げる」に焦点をあてて研究授業を実施し、外部講師の指導を受けた。指導方法改善につなげることができた。	B	探究的な学習について担当を中心にその内容と手段を組織的に研究する。講師を招致し、教員が授業を見合う機会を設ける。
②	家庭学習提出率（7月調査）を90パーセントにする。	家庭学習提出率（7月調査）を9割を超えることができた。児童の家庭環境や能力に合わせた家庭学習の提供を試みることができた。	A	保護者会等で、家庭学習の必要性、自主的に課題に向かう姿勢の重要性を伝え、保護者の理解と協力を得らるように働きかける。
	授業時間内や品川未来塾の学習時間などに、基礎・基本の定着を図る問題に取り組ませる。	品川未来塾や夏季学習教室を開催し、継続的に参加児童の理解の定着を図った。また、校長室で九九の暗唱を希望児童にさせるなど、日常的な基礎・基本習得に努めた。	A	補習の必要がある児童の参加を徹底する。 専科教諭の力を借り、放課後補習の機会を増やし、全校で基礎学力定着に尽くす。
	宿題の内容を全校で統一し、量より質で必ず取り組めるようにして、家庭学習の習慣化させる。	従来の計算ドリル・漢字ドリル・音読の固定的な課題から、自主学習を中心とした課題へ変更し、その効果を確かめることができた。しかし、全校統一して取り組むまではできていない。	B	自主性を育てていく、家庭学習検討の担当者をを決めて、その手段と効果を全教員に共通理解し、習慣化していく。

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立小山台小学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標	○　各教科等や行事を始め、日頃の学校生活の中で、共に生きるよさやより良い生き方に気付くようにする。 ・　学校の教育活動全体において、教職員が児童のよさや努力を認め、自己肯定感や自己有用感を高める。 ・　各行事や授業の中で目標をもち、チームで協力して成し遂げる経験をすることで、協働のよさや仲間の大切さを感じられるようにする。 ・　市民科単元において、挨拶、礼儀等の生活指導の重点目標を関連付けた指導を行う。 ・　きまりを守ることで、共同生活の意義や必要性に気付かせるようにする。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	「自分にはよさや伸びているところがあると思う」という質問に肯定的な回答をした児童が80%以上	全学年アンケート調査では、6学年以外の学年で平均90%が肯定的な回答であった。	A	児童の頑張りや伸びている部分を認め、児童を信頼し、任せる指導をしていく。
	常に児童同士が認め合える学級づくりを心掛け、教育活動全般において個々の能力や特性を活かせる場面を設ける。	運動会、音楽会、児童会活動で、担当児童が活躍する場面、人の役に立つ場面を用意することができた。その価値や伸びたところを見付け合う活動を各学級で行い、紹介し合えた。	A	個々のよさを認めあえる集団にするために、エンカウンター的手法を取り入れるなどして、互いが認め合える学校風土を築く。
	学校だよりや保護者会等で、自己肯定感や自己有用感を高めるポイント（言葉掛けやタイミング）を示し、保護者と連携して児童を褒める。	職員には温かい学校を目指すと伝え、保護者会では教員を守る姿勢を示し、学校だよりで「褒めること」や「俯瞰の力の大切さ」などの児童の成長や努力を認めるポイントを啓発し、保護者と連携して声掛けをしていけるように働きかけた。	A	学校の指導方針や児童の様子などを、学校だよりやHPなどで保護者に発信し、学校の様子を知ってもらい、子どものために協働して動けるコミュニティー作りに尽力する。
②	「きまりを守ることができる」という質問に肯定的な回答をした児童が85%以上	全学年アンケート調査では、6年以外の各学年で平均90%が肯定的な回答であった。	B	学校全体に落ち着きが感じられるようになった。引き続き、安心・安全につながる指導を継続し、習慣化していく。
	市民科の授業において学期に1回以上、規範意識等に関する内容を取り上げる。	きまりの大切さと守る理由について考えさせる授業を行ったり、全校朝会時に講話を行ったりなど、児童が自分事として捉えていけるように日常的に働きかけた。	B	全校集会時や避難訓練での態度が改善されたが、まだ徹底できな児童もいる。意義と意味を伝え、自主的な行動の意識化を図る。
	全校朝会で、生活指導部から今週のめあてを周知し、学級で各自達成できたかを週末に振り返る。	生活指導部を中心に、挨拶、廊下の歩行、公園での過ごし方などについて順に、計画に全校児童に指導をした。週めあてに沿った振り返りも各学級で行えた。	B	粘り強い指導により、学校全体に落ち着きが感じられるようになった。各学級で継続的に指導し、個々の自己改善力を育てる。
	きまりを守る大切さについて意識させる学習を市民科や学活で取り上げ、自治的活動の中で児童自身が話し合えるようにする。	全校で挨拶運動や廊下歩行などの取り組みを行えた。きまりの大切さを考える指導を行っているが、まだ実態は不十分である。引き続き、自ら課題意識をもつよう指導している。	B	人が見ているかどうかに関係なく、自身できまりを守ることの意味や価値を判断して行動できるようにしていく必要がある。

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立小山台小学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標	○　自分のめあてをもち、自ら運動に取り組もうとする児童を育てる。 ・　体育の授業を充実させ、基礎的な体力や健康の増進を図る。 ・　家庭・地域と連携し、様々な活動を紹介し、運動の機会を多く設ける。 ・　保健の授業を初め、担任と養護教諭や栄養士が連携し、具体的で自主的な取り組みにする。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	「運動が好き」という質問に肯定的な回答をした児童が85%以上	全学年アンケート調査では平均93%が肯定的な回答であった。昨年度結果より2ポイント上昇した。	A	校庭が狭く、運動できる機会が少ない。体育授業での運動量確保、体育館の活用、休み時間の全校運動タイムなどを検討していく。
	体育の授業で、児童がめあてをもって取り組もうすることができるようにする。	3年生以上で平均75%が肯定的な回答であった。個々のめあてをもって運動に取り組む姿が概ね見られている。	B	さらに向上させるために、授業めあてを立てる時間を全校で確実に実施する。
	体育の授業や体力強化月間、小山台トライアルなどの取り組みの中で、個人のめあてと達成感をもてるようにする。	カード等を活用し、個人のめあてを立ててから取り組んでいる。機会を設けることで、平均95%の児童が意識できた。	B	児童の実態は、肯定的な評価に見合うほど高くない。実技研修を実施し、運動例や声掛けの仕方について向上させていく。
	児童用タブレットを活用して運動プログラムの事例を紹介し、身体を動かすきっかけにできるようにする。	タブレットを活用する習慣ができつつある。体育では、児童が互いに動きを録画し合い、学習に生かしている。客観的に自分の動作を見ることで改善への意欲喚起に役立っている。	A	タブレット活用さらに進める。手本となる動画をみたり、自分の気づきを書き留めたりして、動きの振り返りの質を向上させる。
	休み時間に体を動かす機会を増やすために、短縄、長縄の運動例や遊びを紹介したり、集団遊びの機会を設けたりする。	体育委員会が集会等でモデルとなる動きを紹介した。しかし、外壁工事もあり、校庭使用が十分でない。体育館を開放するなどして対応したが、十分な機会が得られていない。	C	次年度は、１週間に１回程度のペースで休み時間を活用し、定期的に運動する機会を設ける取り組みを実施する予定。
②	「食事や健康に気を付けている」という質問に肯定的な回答した児童が90%以上	アンケート調査では、92%が肯定的な回答であった。栄養教諭を中心に低学年と高学年で食育授業を実施した。	A	タブレット長時間視聴や姿勢などが気になる。視力低下防止のためだけでなく、自ら健康に気遣える自主性を育てていく。
	保健だよりを毎月発行し、感染予防、栄養や食事、健康管理の方法を発信し意識を高める。	感染症への注意喚起が適切に行えた。室内換気やマスク着用を徹底し、現在まで学級閉鎖を行うことなく流行を防ぐことができている。	A	感染予防の具体的な方法（密集回避、黙食、手洗いなど）を示すなどして、児童・保護者への注意喚起と意識啓発を継続していく。
	給食だよりを毎月発行し、保護者に対して栄養摂取や食事の方法を啓発する。	充実した内容で給食だよりを発行できた。給食試食会を実施し、保護者の食に対する意識を向上させることができた。	A	中学年においても食育授業を行うようにし、食育の質と回数の向上に努める。
	毎日「もりもりつうしん」を発行したり、給食時に全校放送で周知するなど、食材の特徴や栄養に関する情報を児童に向けて発信する。	栄養教諭と栄養士が協力して欠かさず発行した。「もりもりつうしん」を担任がクイズ形式で給食前に知らせることで興味をもつ児童が増えた。栄養教諭による食育授業も効果的だった。	A	HPで保護者に給食レシピを紹介したり、希望児童へレシピ配布を行ったりしている。引き続き、食育の視点を発信して啓発していく。

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立小山台小学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	〇人権尊重の精神により、教職員全員がいじめは絶対に許さないという毅然とした態度で未然防止に取り組む。 いじめが発生した場合は、学校体制で指導や支援にあたる。 ・ 悪口やひやかしについては、その場で教師が指導する。いじめや暴力行為については、担任と生活指導主任または学年主任の複数体制で、個別指導を行う。 ・ 児童自身がいじめは絶対に許されないことであるという認識をもつように、予防教育や自治的活動にも重点を置いて指導する。また、保護者にも理解を求め、連携しながら改善に取り組む。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	「いじめをなくしていかなければならない」という質問に肯定的な回答をした児童が80%以上	全学年アンケートで平均98%が肯定的な回答であった。いじめに対する認識を児童・教職員とも高め、徹底化することができた。	A	高評価を継続できるように意識して未然防止を働き掛けていく。課題は保護者の意識啓発である。日常の行動観察で実態把握に努め、保護者との連携を密にしながら先手必勝で対応していく。
	いじめ防止推進デーや人権週間、朝会や学級での講話を行い、日常的ないじめへの意識啓発を行う。	校長による講話や学級担任による話を行い、意識啓発を行った。	A	講話回数と効果に関係があるかが疑問である。具体的な事例を示しながら適宜実施する。
	未然防止のために、校内いじめ防止対策委員会の開催と市民科授業におけるいじめ防止授業の実施を行い、いじめ根絶の意識を高める。	いじめ防止の市民科授業を年3回実施した。計画委員会を中心に人権標語の作成や各学級ごとのいじめ根絶宣言を行い、児童の自治的活動を行えた。児童のいじめ防止への意識を高めることができた。	A	人権週間等と関連させるなどして、年間を通して計画的にいじめ防止に向けた授業を行っていく。児童が自分事として考えられるよう内容を工夫していく。
	各種アンケート（デイケン・いじめDアンケート・NiCoLi）を確実に実施し、児童の実態を把握して、いじめの未然防止と早期対応を行う。	タブレットを活用したアンケートを日常的に実施した。90%以上の児童が毎日チェックする習慣ができた。月１回担任と管理職が、アンケート実施後の聞き取り等で得た情報を確認した。	A	課題は、毎日できていない児童がまだいることである。児童がお互いに声を掛け合えるようにしていく。
	１週間に１度の生活指導夕会を行い、いじめ・不登校、配慮を要する児童への状況を全教職員で共通理解する。	毎週金曜日にいじめ・不登校について教職員間の情報交換を行えた。担任以外の全教職員で対応していくという環境と体制が築けた。	A	週1回の生活指導夕会を継続していく。課題は、情報共有の質と量である。高められるように、いじめ防止研修や話し合う項目の選定に努める。
	いじめと疑われる事案が発生した場合は、即日にいじめ防止対策委員会を開催し、対応策を協議し、全教職員に周知する。	月1回の学校いじめ対策委員会の他に臨時で10回程度開き、情報共有と対応策を協議することができた。「品川区いじめ防止対策推進基本方針」に基づき、早期発見・対応を組織的に行えた。	B	委員会の中の役割分担や仕事量について明確化とスリム化を図る。

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立小山台小学校

公開

評価項目５　（特色ある教育活動に関すること）

重点目標	○国際理解教育を通して、将来共生社会で活躍できる人材の育成を目指す。 ・ 人権尊重の基盤となる「人の話をしっかり聞く」「相手の立場に立って考える」姿勢を指導する。 ・ 自国文化理解につながる教育活動を充実させる。 ・ 多文化に触れることで、外国の文化の違いやよさを理解し尊重する態度を培う。 ・ 児童が必要性を感じて意欲的に取り組むことができる英語教育を推進し、コミュニケーション能力を高める。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	「日本と外国の考え方や文化の違いを理解している」という質問に対して、肯定的な回答をした児童を85%以上にする。	全学年アンケートでは、国際理解教育に対して平均92%が肯定的な回答であった。児童も教員も意識して、考え方や文化の違いを考えようとしている。	A	授業の組み立てに「比較」の視点を設けるようにして、児童が分かりやすく国際理解を学べるように工夫していく。
	授業の中で、日本と外国の文化の違いやよさに気付ける活動を組み入れる。	イングリッシュキャンプ（4年）、箏体験（5年）、能楽体験（6年）を実施した。文化の違いだけでなく、習慣や考え方の違いまで気付ける児童が増えた。給食のメニューに外国のメニューや郷土料理を取り入れるなど工夫し、文化理解の促進ができた。	A	体験的な学習ができるように、授業展開の工夫や関係諸機関の開拓を進める。次年度は、4年生でTGG（TOKYO GLOBAL GATEWAY）を実施する。
	社会科や市民科を中心に、各教科で国際理解につながる活動を全学年で計画的に実施する。	各学年において計画的に実施することができた。低学年で国際理解につながる学習活動を組めなかった。	B	全学年で、多様性の理解、人権尊重の精神が身に付くよう、各教科の計画上に位置付けるなどして、改善に取り組む。
	インドネシア学校との交流において、具体的な情報交換等を行うとともに、実際に触れ合って関係をつくる活動を充実させる。	3学期に5年生で目黒区のインドネシアインターナショナル校と交流授業を実施した。英語や日本語を互いに使い合うなど、児童同士の交流活動ができ、大変有意義だった。	A	令和8年度より、交互に来校するなど交流を継続的に重ねていく約束を取り付けた。交流活動を増やし、国際理解き教育の推進に力を入れていく。
②	「英語が楽しい」という質問に対して、肯定的な回答をした児童を80%以上にする。	令和7年度の全学年アンケートでは、平均84%が肯定的な回答だった。また、令和6年度品川区児童・生徒アンケートでは、「英語の学習は大切である」で93.2%が肯定的な回答をしている。	A	引き続き、児童に英語で会話できる喜びや世界共通語である英語を学ぶ意義を伝え、自主的に学ぼうとする授業展開の工夫を進める。
	授業で英語を活用した会話機会を増やし、児童に英語で物事が伝わる喜びや楽しさを味わわせる授業を実施する。	ペアトークなどの対話を重視した活動を行うことがきた。タブレットを活用しながらコミュニケーション機会を増やすことができた。	A	引き続き、会話を重視し、英語で物事が伝わる喜びを味わえる授業展開を工夫していく。
	タブレットや視聴覚機器等を用いて、教室ににおいても体験的な英語学習ができるようにする。	視聴覚機器（電子黒板、CD、DVD、書画カメラ、タブレット等）の有効な活用を進めた。動画や発音方法などで児童の関心を高めることができた。	A	QRコードで読み取ると英語が聞ける掲示を廊下に設けたり、タブレットを英語会話アプリを入れたりして、効果的なICT機器の活用方法を開発する。
	担任とALT・JTEで発問や指示の検討をし、英語の必要性を感じる授業場面を設ける。	担任とALT・JTEとの関わり方について検討する機会を設け、連携を強めることができた。指導がスムーズに行えるように改善できた。	A	日常的に、ALTやJTEとの相談や連携ができるように、役割分担やその在り方について研究していく。

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成